

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011年度 参加者レポート

赤松 茉依 ---St Olaf College

中間レポート

2011年の8月27日にFLTAとして渡米しました。私は『日本以外の国で日本のことを伝えられる人になりたい、日本を客観的にみたい』という思いでこのプログラムに応募しました。このプログラムに合格することは念願で、決して簡単ではありませんでした。なので、派遣されることが決まったときはすごく感動しました。派遣先がミネソタ州ということを知ってさらにうれしくなりました。ミネソタ州のことは前から知っていましたし、すごく平和で安全なイメージを持っていたからです。渡米して5ヶ月が経ちましたが、アメリカでの生活や仕事は予想していたものとは全く違いました。

今まで留学経験がありませんでしたが、渡米前は自分は絶対にホームシックにはならないタイプだろうと思っていました。しかし、実際にミネソタでの生活が始まるとはじめての2、3ヶ月はすべてが不便で、なにもかもがスムーズにいかず外国で生活をするってこんなに大変なのかと思知らされました。一番感じたのは、日本がいかに安全で住みやすいかということです。今自分がいるのが『日本ではない』ということが不安で、何をするのに時間がかかりました。こんな不安だらけのスタートでしたが、学期が始まると日々仕事や授業に追われてホームシックになる時間ありませんでした。

私の生徒としての生活ですが、なるべくアメリカの観点から日本や世界を見たいと思い、1学期には国際関係学とアメリカ政治学をとっていました。私の派遣先のセントオラフ大学は、地元から来ている生徒が多く、留学生が本当に少ないので私がとった授業のほとんどが私を除いて全員アメリカ人でした。国際関係学の授業では、講義というよりも毎回ワークショップがあり、与えられたリーディングから課題を各自で取り組み、それをクラスでディベートするという内容でした。はじめは、生徒が何を言っているのか全くわからなくてリスニングに苦労しました。日本で聞いていた英語と、本場のアメリカで聞く英語は全く違いました。授業を本当に理解したいのに聞かえないというつらさを経験し、とても悔しい思いをしました。アメリカに来て、一ヶ月くらい経ったころ、英語が英語に聞かなくなり、体が英語を拒否していた時期もありました。聞かえなかったところを補うために、授業前や授業後はクラスメートと一緒に勉強し、わからなかったところを教えてもらい授業



に備えました。また、リーディングも予想通り毎日大変でした。はじめは、量をこなすことで必死でしたが、不思議と時間が経つごとに慣れていきました。

日本語の助手としての仕事ですが、私が渡米前にイメージしていた助手の仕事とは少し違いました。私は、毎週月曜日に日本語の会話テーブル、チューターやインタビューを週11時間（1年生から4年生まで）、日本語ラボのクラスが週4時間（1年生と2年生）、日本語の授業見学が週2時間です。まず、会話テーブルですが毎週日本に関するトピックについて夕食を食べながら話したり、日本語でのゲームや文化紹介などをします。セントオラフ大学の日本語の学生は本当にモチベーションが高いので会話テーブルの間は基本的には日本語しか話しません。毎週20人〜多くて4、50人の生徒が会話テーブルに来ます。日本語を始めたばかりの1年生〜ペラペラの4年生まで会話テーブルに参加しますが、4年生がリーダーとなり会話を進めたり、一年生に新しい表現を教えることでランダムな仲、交流をもち楽しくやっています。

チューターやインタビューでは主に日本文化について2〜3人ずつの学生と話します。例えば、高校時代の部活の先輩・後輩の上下関係、日本の宗教、日本の休暇、学校のいじめ問題などアメリカにはない日本の文化について学生が質問し私が答えます。また、学生も自分の国のことについて日本語で話します。日本文化を伝えると同時に他の国の文化のこともたくさん知ることができる貴重な時間です。

ラボでは主に、普段の日本語の授業で学んだことを『実際に

使う』という意味でドリルや会話の練習をします。毎回教案を書いて、インストラクターの先生に提出し、フィードバックをもらった後授業をします。授業が終わったら、ミーティングをし改善点などについて話し合います。この経験は、言語を教えるという意味では、日本で英語を教えることと共通することばかりで、毎回学ぶことが多いです。日本語を教えるという点では、『文化を教える』ということに苦労しています。特に日本へ行ったことがない生徒に日本文化を話すときは、いかに彼らが持っているステレオタイプを壊すかということに気を付けています。例えば『日本人はほぼ毎日すしを食べる』と思っている生徒も少なくありません。そういうステレオタイプを破るのが私の仕事だと、インストラクターの先生に言われました。こういう面で今まで持ったことのない視点で『文化を教える』ということに関しては苦労しています。自分の一言がいかに生徒の持っている日本のイメージに影響を与えるかということの日々感じます。後半も、生徒が日本へ行ったときに、できるだけギャップが少なくなるように日本文化を伝えていきたいと思っています。また、前半は授業を終えるだけでいっぱいだった部分があったので、後半はもう少し余裕をもって毎回の授業が同じにならないように新しいことに挑戦したいです。

最後に、今アメリカにきて5ヶ月ですが、アメリカに来てから目標としてきた『日本のことをアメリカで伝える』ということと、『日本を客観的に見る』という点では、かなり充実しています。いい意味でも悪い意味でも、日本がアメリカからどういう風に見えるかがすごくよくわかります。例えば携帯電話の触り方ですら、『日本人らしいソフトタッチ』といわれたり、宿題をまじめにしていると『日本人だから』といわれたり、鳥の話をしていると『日本の鳥も礼儀正しいの?』といわれたりします。一方で、日本の文化のほめられたり、国民性が好きだといわれたり、この5ヶ月の間でも日本のいい面、悪い面がたくさん見えました。残り4ヶ月ですが、目標は失敗を恐れずに新しいことに挑戦したいと思っています。今まで以上に日本語の生徒から学ぶこと、語学の教授法としてインストラクターの先生方から学ぶこと、自分の履修しているクラスから学ぶことを楽しみながら頑張りたいと思います。

最終レポート

FLTA プログラムを終えて日本に帰国してからもうすぐ1カ月が経とうとしています。ミネソタでの10カ月を振り返ると前半は、初めての海外生活にトラブルがつきまわり、なにもかもスムーズにいかず、仕事や授業の課題などに追われ必死の日々でしたが、時間がたつにつれ少し余裕が出てきたのが、ミネソタに来て半年くらいのことでした。

履修していた授業自体は簡単になることはなく、むしろ内



容は難しくなっていました。しかし、自然と半年間毎日何百ページも読み続けると、リーディングが苦でなくなりすらすらと読めるようになりました。大学の規模が小さいため、クラスのサイズは相変わらず小さくディスカッションやディベートが中心でした。アメリカ人は、比較的プレゼンテーションに慣れているようでした。友人から聞いた話では、アメリカでは小学校1年生の頃から、好きな食べ物についての1分のプレゼンテーションなどの課題があり、小さいころからプレゼンテーションをする習慣があるようです。それに比べ、大学3年生になるまで一度も人前で話したことがなかった私にとって、クラスでのディスカッション、プレゼンテーション、ディベートなどが苦痛で仕方ありませんでした。これだけは、リーディングのように時間が経てば慣れるというものではなく、慣れるには時間がかかりました。クラスの中でのディスカッションに入っていかなければ、自分はどんどん置いていかれる、自分から入っていかない限りはクラスに来る意味もないという状況でした。たださえ、アメリカ人の中に外国人一人という状況で言語の壁を感じていた上、アウトプットを求められると、毎回授業についていけなくなり「これが日本語やったらなあ。日本語やったら分かるはず。」などと心の中でいつも自分に言い訳をするようになりました。実際に、第二言語で何かを学ぶということは、自分の本来のIQが半分になるような感覚でした。

しかし、渡米して半年が過ぎた頃、世界の共通言語は英語でそれはもう変えられないこと、だから第二言語だからという言い訳をするのはやめて自分なりに出来る範囲で頑張るしかない先輩に言われました。英語のネイティブはずるい、などと思っていた私にぐさっとささる一言でした。それ以来、失敗を気にせず、とにかく挑戦してみるという想いで毎回授業に参加し、必ず一回は自分の意見をクラスで言うという目標を決めました。無理矢理に自分の意見を話す練習をしている間に、人前で話すことや自分の意見を言うことにも慣れました。そうすると自然と、自分がクラスで得ることや勉強することが以前より増えた気がします。積極的になればなるほど学べる可能性があるということを実感しました。また、自分が一生懸

命に取り組むとクラスメートが助けってくれたり、周りも私の努力を見てくれていました。

また、日本文化を教えるという面では、アジアウィークやインターナショナルナイトなどアジアに関するイベントなどがたくさんありました。これはアメリカの大学で日本のインパクトを残せるチャンスだと思い、アジアウィークで学生とソーラン節を踊るという企画を立てました。しかし、アメリカ人をまとめることは簡単ではありませんでした。学生に「ソーラン節を踊りたい人」と声をかけると、予想以上に参加するという声が多く喜んでいたのもつかの間、実際練習日になると来ない学生や、「宿題で忙しいのでやめます」という学生が増え人数はどんどん減っていきました。この事実にはショックを受けた私ですが、アメリカでは「参加します」といったからといって「必ず参加する」ということではないということに後に他の日本人の先生から聞き驚きました。このようなカルチャーショックがありながらも、最終的に残ったメンバーでのソーラン節は成功し、大変だった分やってよかったと思える経験になりました。また、ソーラン節のように踊る人全員が息をそろえて合わせて踊ることが美とされる日本のダンスは海外で好評でした。「どうやったらあんなにぴったりに全員が同じタイミングで踊れるの？日本らしくてすごくいい。」など自分でも気付かなかった日本の踊りの美しさを指摘され、すごく嬉しく思いました。

この10カ月間、今思えば毎日が新しいことの発見と挑戦の日々でした。「海外でたった一人暮らす」ということがどれだけ不便なことかを実感し、プログラムを終えた今でも大変だったなあと思います。それでもやっぱり行ってよかった、また行きたいと思えるのは、実際に行ってみないと経験できないことがたくさんあるからです。正直、英語の先生になるためなら留学なんてしなくても、英語は日本で勉強できると思っていました。確かに語学は日本でも勉強できるかもしれませんが、でも、外国で自分がマイノリティーとして生活していくことの大変さ、日本とは全く違ったアメリカの文化など、実際に経験しないと知る機会さえもないことがたくさんあります。また、この10カ月で何のために言語を学ぶのかということ学びました。英語をツールにすると、世界中の人々と出会うことができる、そして自分の可能性も広げることができます。帰国後には、渡米前には考えもしなかったようなことも「挑戦してみたい」と思えるようになっていました。また、渡米前に比べ、自分が日本人でよかったと思う瞬間が何度もあり、帰国後はより自分の国を誇りに思えるようになりました。このプログラムを通して学んだ「自分の国以外で自分の国のことを伝える」ということを軸に、これから新たな目標に向かって頑張ります。フルブライトでの経験は私の人生を大きく変える素晴らしい経験でした。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011年度 参加者レポート

郡司 菜津美 ---U of Central Florida

中間レポート

私はフロリダ州オーランドにあるセントラルフロリダ大学 (University of Central Florida, 以下 UCF) の Burnett Honors College というところで働いています。この大学は春・夏・秋学期の3期制で、私は秋学期と春学期を担当させていただきました。生徒の数は5万人を超え、アメリカで2番目に大きな大学とだけあって、キャンパスもとても広いです。バスが構内を走り回ってはいるものの、基本的にどこへ行くにも車が必要で、公共交通機関は飛行機くらい、といっても過言ではないと思います。ただ、Carpoolの文化があるので、友達さえ作ってしまえば何の問題もありません。オーランドは一年中暖かく、クリスマスも新年も薄着で過ごせるほどの気候で、夏は夕立にほぼ毎日襲われますが、日本のような蒸し暑さとは異なり、とても過ごしやすい土地柄だと思います。本レポートでは、授業面、生活面の2点から私の生活を報告させていただきます。

まず、授業面についてのお話をさせていただきます。今だからお話できることですが、アメリカに来る前、私は「アシスタント」として授業をすると思っていました。日本で行われたオリエンテーションで配布された資料にそう記載されていたからです。しかし実際には、全くその状況が異なりました。渡米後のオリエンテーションも終え、さあ私はどんな人の下で働くのだろうとわくわくしていたら、「あなたの授業は2つありますからね」とポンと教科書だけ渡されたのです。確か授業開始の3日前くらいだったと思います。少し表現は大袈裟かもしれませんが、当時の私の周りには指導してくれる先生も、相談する日本人も誰もいなかったもので、期待に膨らむ9ヶ月のアメリカ生活から、一瞬で絶望のどん底に突き落とされたようなそんな気持ちでした。「え、どうやって授業すればいいの?」それが私のFLTAとしてのスタートでした。

結局私はクラスを3つ担当し、毎日授業をすることになりました。しかも、「日本語と日本文化」という何とも曖昧なコースタイトルで、生徒のレベルも、生徒によって求められていることもバラバラで、どのように授業を進めていけばいいのかわからず、毎日手探りの状態でした。ただ、いつも思っていたことは「日本人が授業をするのだから、私にしかできない授業に



しよう」ということでした。実際にネイティブの先生の授業は他にもありましたが、生徒の中にはベテランの先生の「日本語」の授業をとっている子もいました。だからこそ、日本文化の中で育ってきた日本人として、25歳の等身大の自分ができることを生徒に伝えよう、「郡司菜津美」の授業をすればいいのだ。いつの間にかそんな風に考えていたと思います。

今振り返ると、統一感のない授業だったかもしれません。「日本語」の授業としては最悪だったかもしれませんが、毎回笑顔の絶えない授業にしてきたつもりです。おにぎりやお寿司を作って食べたり、折り紙、だるまさんが転んだ、ポコペンなど子どもたちの遊び、ドラえもんや宮崎アニメの鑑賞、大富豪や一休さんなどトランプゲームをしたりすることもありました。キャバクラやホスト、大学生の飲み会文化の紹介をしたり、日本に滞在経験のある生徒が写真を使って「日本紹介」をしたりすることもありました。気付くとあっという間に4ヶ月経っていたように思います。当初は「どうしよう、うまくやっていけるのだろうか」と不安だったスーパーバイザーの方も、実際にはとても協力的で、私のやりたいことを何でもきいてくれましたし、とても親切な方でした。ちなみに、私のクラスは単位のないクラスだったので、成績をつける必要がなく、テストもほとんどやりませんでした。大学生活で単位の出ない授業に毎回出席するなど、私だったら考えられなかったので「せっかく私の授業をとってくれたのだ。生徒に何かお礼がしたい。」と、授業の最後に、クラスの授業風景を撮りためた写真やビデオから、ムービーを作成してプレゼントしました。写真は、そのムービーの一部です。

一番右上が私です。会話クラスでは日本語で映画を撮影したのですが、生徒の提案で私も出演することになりました。左隣に写っている男子生徒と実は生き別れの双子だったという設定で、双子の証拠として星のあざを腕に書いた時の写真です。学生たちは本当に日本が大好きで、私が秋学期に無事にクラスを終えることが出来たのは彼らのおかげだったと本当に強く思います。

次に、生活面についてのお話をさせていただきます。私は大学構内にある1年生のための寮に住んでいます。そこは授業をする教室まで5分足らず、ととても便利な場所にあり、開講中は特に不自由することはありません。冬休み中は寮をでなければならず「どこで寝泊りすればいいんだろう」と不安になることもありましたが、実際には旅行に行ったり友人の家に泊めてもらったりと1ヶ月間気ままに過ごすことができました。というのも、本来はスーパーバイザーの家に滞在させてもらったので、当初から住居に関しての心配をする必要はなかったのですが、1ヶ月間他人の家にお邪魔するのは肩身が狭い思いをするだろうと思っていたので。また、構内にはファストフードの店舗がたくさんあり、歩いて15分程度の場所に24時間営業のスーパーもあるので、食に関して困ったことはありません。寮にはキッチンもあるので、毎日料理をすれば高カロリーの食事も避けることができます。ただ、私はオーランドの水道水の匂いに慣れるまで時間がかかり、入寮して1ヶ月後には蛇口にフィルターを取り付けるまでに至りました。毎日の生活に欠かせない「水」だったので、その貴重さに改めて気づかされた経験だったと思います。オーランドでの生活を始めて驚いたのは、どの場所も24時間冷房のスイッチが入ればなしであるということでした。渡米時期が夏だったこともありませんが、私の寮は本レポートを執筆中の1月現在も24時間冷房のスイッチが入ったままです。入寮当時、真夏であったにも関わらずあまりの寒さに布団を頭からかぶって寝たこともありましたが、厚手の上着を1枚しか持っていなかったため、友達に頼んで車を出してもらい洋服を買いに行きましたが、服の安さに驚いたことも忘れられません。渡米前から「現地で買い物するんだ」と決めていたので、渡米してからの買い物はひとつの楽しみになったと思います。

私はUCFで初めてのFLTAということもあり、1年生の寮生活をサポートするアシスタントの大学3年生2名と一緒に住んでいます。彼女たちはとても活潑な子で、出会ってからすぐにディズニーやユニバーサルなどのテーマパーク、繁華街のクラブや地元のバー、カヤックやロッククライミングといったスポーツなど、とにかくたくさんの「アメリカ経験」に連れ出してくれました。現地の学生の視点でアメリカ文化を直接体験できるとは思っていませんでしたので、本当に貴重な経験をさせていただいていると毎日実感しています。同じ大学にFLTA

の仲間がいないのはとても寂しいですが、この大学でFLTAとして働かせていただけて本当に感謝しています。

最後になりますが、こうして素晴らしい毎日をご過ごせるのは日米教育委員会やIIE、UCFのスタッフをはじめとして私をサポートしてくれる全ての方々のご尽力のおかげであることは言うまでもありません。この場をお借りして感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。FLTAとして経験させていただいている全てのことをレポートすれば、おそらく1本の論文が出来上がることでしょう。それだけでは足りないかもしれません。それほどまでに濃密で素晴らしい瞬間を積み重ねているということを本レポートの最後に一言述べさせていただきます。心より感謝申し上げます。

最終レポート

1. はじめに

最終レポートを書く瞬間など遠い未来にあったはずなのに、気が付けば帰国してから1ヶ月以上経ってしまいました。オーランドは一年中温暖な気候で、時間が止まってしまったかのような長閑な地域なので、日本に帰国し秒刻みの都会の生活リズムに一度戻ってしまうと、オーランドでの生活が幻だったのではないかと思ってしまうほどです。そんな目まぐるしい毎を送りながらも、FLTAプログラムを通して出会った友人と継続的に連絡をとり合い、あの毎日は「本物」だったのだ、と実感しながら日本での新しい生活を日々過ごしています。本来、FLTAの契約期間は9ヶ月間だったのですが、私はビザが残っていたことを理由に、寮を出たあと1ヶ月間友人の家に滞在させてもらい、計10ヶ月をアメリカで過ごしました。本最終レポートでは、その10ヶ月間のアメリカでの生活を振り返っての報告をしたいと思います。

2. 学生として

まず、学生としての生活について報告をしたいと思います。私は、秋学期にアメリカの歴史と、少年犯罪学を受講しました。日本で生活していた頃、神奈川県警下で非行少年に学習支援をするボランティアをしていた経験もあり、少年犯罪について興味をもっていたからです。当初、自分の英語力に自信がなかったため、授業についていけないのかとても心配でした。教授に許可をとりICレコーダーを持参して、授業中にわからなかった箇所を復習したり、授業後に教授に質問したりとなんとかついていけるように努力しました。授業自体はノンクレジットだったので、テストを受けても成績が出ず、気軽な身分だったのでプレッシャーもなく学べたことが功を奏したのだと思い

ます。

春学期は、性犯罪学と異文化心理学を受講しました。どちらのクラスも自分の専攻に関係のあったものだったのでとても興味深く、授業が3時間近くあっても全く気になりませんでした。日本の授業システムとは異なり、週に2回～3回授業があるので、教授に対する親近感も湧きやすく、質問したり発言したりすることに抵抗を感じにくかったです。また、学生の発言の多さには驚きました。何か思うことがあれば即座に挙手し、どんなに広い教室でも怖気付くことなく自分の意見を述べる姿を何度も拝見しました。私は英語力に自信がなかったのでなかなか発言する機会はありませんでしたが、その悔しさは現在の勉学に影響し、もっともっと努力しなければ、と励みになっています。その他に、1年生が必修として受講するオムニバスの授業があり、様々な専門分野で活躍する方のお話を聞く機会がありました。その中で「君たちはアメリカ合衆国の若者なのだ、No.1の国のNo.1を目指せ」という講話を聞き、日本にはない教育方法だなあと刺激になりました。余談ですが、UCFでは教科書を貸し出す制度があったので、ほとんどの生徒が教科書をレンタルして使っていました。どんなにコーヒーマシンのシミで汚れていても、落書きや書き込みがあっても、教科書がきちんと再利用されているのには感心しました。

3. 教師として

次に、日本語教師としての報告をしたいと思います。秋学期については中間レポートに記載した通りで、UCFで初めてのFLTAとして、戸惑うことやわからないことが沢山ありました。春学期になると、クラスをレベル別に設定してもらい、学生のニーズや目標に沿った授業を展開しやすくなり、授業に少しずつ慣れていきました。初級・中級・会話の3クラスを担当し、各クラス少人数で授業を行ったので、学生との距離も近い状態でした。私のクラスはノンクレジットで単位も成績もでないクラスだったので、生徒のモチベーションを維持するのに苦労しましたが、学生は忙しいスケジュールをやりくりしながらも、授業に出席してくれました。初級クラスでは、簡単な会話を取り入れたショートムービーを作成したり、日本語を使って大学構内を案内させたり、実践的な日本語を使うように心がけ、日本語の楽しさを伝えることを目標として授業を展開しました。中級クラスは秋学期に受講してくれた学生の持ち上がりのクラスだったので、「自分を表現すること」を目標に、前期には出来なかったプレゼンテーションを取り入れ、自分のことや日本について発表する機会を多く作りました。一番印象に残っているのは、家族写真を用いたの発表です。現在のようデジタルデータではなく、フィルムで撮っていた時代の写真を持参してきた学生が、「これは、小さい時の私です。」と一生懸命に発表してくれたのは感動しました。言葉は「伝えたいこと」があって初めて役に立つ、そんな当たり前のことを改



めて実感させられた記憶があります。会話クラスでは、日本で働くことを目指している学生や、ネイティブ並みに日本語を話せる学生がおり、日本語の会話クラスとしてかなり上級コースだったと思います。学生のモチベーションを考慮し、会話クラスの目標は「自分の言葉で議論し、納得すること」でした。毎回異なるトピックで「レジ袋は有料化するべきか」「男と女ではどちらが得か」など、身近な話題を取り上げて議論する機会を多く取り入れました。母国語では簡単に結論が出そうな内容でも、自分の言いたいことを出来るだけ正確に日本語で話すには苦労するようで、彼らの努力する姿がとても印象的だったのを覚えています。時にはアメリカと日本の政治の仕組みの違いについて互いに学ぶこともあり、総合的に学生の助けを得ながら授業を進めることが多かったように思います。どの生徒をとっても授業を進行する上で私にとって欠かせない存在で、私の授業は彼らなしでは成立しなかったと思います。私は日本語を授業として教えた経験がなく、UCFにおいて初めてのFLTAだったので、当初は不安なことばかりでしたが、学生たちに助けられ、スーパーバイザーの先生方に支えられながら授業を終えることができたと思っています。

4. アメリカ生活の中で

最後に、私がアメリカで過ごした10ヶ月間を通して、経験したことや学んだことについて簡単に報告します。私は、渡米してすぐ、ロッククライミングを始めました。ルームメイトに誘われて、大学のジムのクライミングタワーに登りに行ったことがきっかけでした。あっという間にクライミングの魅力にとりつかれた私は、その後、月に35ドル払いながら本格的なロッククライミングジムに通い、週に3回程度通うほどロッククライミング漬けになりました。渡米前は、腕立て伏せも懸垂も一度も出来なかった私が、今では男子の平均回数程度はこなせるようになり、女子の腕とは思えないほど上腕も太くなりました。こんなにクライミングにはまったのは、共に通っていた仲間たちの存在がとても大きかったと思います。ジムで出会った仲間たちは、英語でコミュニケーションをとることに不

自由だった私を当初から快く受け入れてくれるような人たちがした。一番簡単なルートもなかなかクリア出来ず、一人で輪から外れて練習している私に積極的に声をかけ、こうすればいい、ああすればいい、と身振り手振りで一生懸命に教えてくれ、アウトドア旅行でクライミングに行く時も「ナツミも一緒にいかないか?」と声をかけてくれたのです。ロッククライミングは個人の能力が全てといっても過言ではありませんが、登るときに後ろでサポートしてくれる人も必ず必要になります。特に、ロープを使って登るときは必ずパディが必要です。登っている最中も、励ましあい、力強い言葉をかけあいます。周りの友人の中で一番初心者だった私は、当然のように一番下手くそだったのですが、彼らはどんな時も真剣にアドバイスをくれたり、励ましてくれたりと、心強い仲間にも恵まれました。ロッククライミングは、日本でも出会うことのできるスポーツではありますが、不慣れたアメリカ生活の中でこのスポーツに出会うことが出来たのは、私にとって非常に重要なタイミングだったと思っています。

先にも述べましたが、私は FLTA としての仕事を終えた後、1ヶ月間アメリカに滞在していました。ビザの有効期限ギリギリまで滞在したい、と思えるほどの日々を過ごせたのは、アメリカで出会った友人と、そのあたたかい家族のおかげでした。冬休み中に寮を追い出された時も（当初はスーパーバイザーの家に滞在予定でした）、友人の家族の家に1ヶ月間滞在させてもらったり、休みの日に家族のイベントに参加させてもらったり、時には湖でウォータースキーを経験させてくれたり、と本当に良くしていただきました。数え切れないほどの新しい経験と思い出をたくさんの方々にいただき、私はおそらく一番幸せな FLTA だったのではないかと、思えるほどです。

この10ヶ月間を通して改めて学んだことは、「人は平等に時間を与えられている」ということでした。私が現在生活している横浜の地とオーランドでは、時差はありますが、同じように時間は流れています。様々な国から集まり、様々な文化で育ってきた FLTA が母国に帰ったあとも、彼らには同じように時間が流れていきます。その中で「何を経験し、何を学び、何を吸収し、何を生んでいくか」ということは、時間の幅に関係なく、その人の考え方や環境や生き方によって変わっていくのです。何が正しいとか、間違っているということはありません。ただ、「人は平等に時間を与えられている」のです。私は、同じ時間の幅を与えられているのなら、その幅を一生懸命に生きて、生きて、生き抜いてやる、と今回の経験を終えて、改めて実感することができました。

5. おわりに

このプログラムに参加して得られたものは、正直、言葉だけ

ではとても表現することが出来ません。私が繊細な言葉を操る詩人でも、その細やかさだけでは表現できないくらいに、厚みのある経験をさせていただきました。世界各国から集まった FLTA は人間として尊敬できる人たちばかりで、世界中に友人ができたこと、何より彼らの人生に出会えたことが本当に誇りです。FLTA だけではありません。IIE の方々、日米教育委員会の方々、UCF のスタッフの方々、アメリカで出会ったたくさんの友人たち、学生たち、他にも私を助けてくれた道行く人たちの存在が、私を支え、「郡司菜津美」をつくってくださったのです。今、この10ヶ月の経験がこれからの人生を豊かにしてくれると、揺るぎない確信と自信をもっています。この場をお借りして、この10ヶ月の素晴らしい経験を与えてくださった皆様に、御礼を申し上げます。本当に本当に、ありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011年度 参加者レポート

長又 みらの ---Spelman College

中間レポート

私が派遣された大学は、ジョージア州アトランタにある、Spelman Collegeという黒人女子大学です。もちろん、黒人大学ですから、黒人しかいないと分かっていましたが、いざ行ってみると、やはり想像以上の驚きがありました。自分一人だけがアジア人であって、自分が、ここでは「外国人」であるという現実を実感しました。他の一般の大学では、アジア人、白人の学生などがいるので、多様性があると思うのですが、ここではその多様性はありません。なので、特殊な環境に慣れるのに少し時間はかかりました。もちろん、今ではすっかり慣れました。

私は、初歩レベルのクラスをインストラクターとして受け持つことになりました。私の派遣されている大学は女子大学ですが、ここでは、すぐ隣にある他の黒人大学と提携していて、生徒がお互いの大学間で授業を取れるので、私の生徒には男の子もいます。男女合わせて25名の生徒を秋学期では教えることになりました。これも分かっていたことなのですが、やはりアメリカと日本では、学生の授業を受ける姿勢が違います。日本人の学生が比較的受動的なのに対して、こちらの学生はとても能動的で、質問をよくしてきます。たまに質問が続いて、授業が進まなかったことが多かったです。それは、良いことなのですが、折り合いをつけないと、本当に授業が進みません。また、ただ文法事項を述べるだけでは、彼らは飽きてしまうので、パワーポイントでイラストやアニメーションを使って少しでも彼らの注意を引けるように心がけました。最初こそは、緊張して上手くしゃべれず、思うように授業を展開できませんでした。時が進むにつれ緊張もとれ、スムーズに授業を展開できるようになりました。

アクティビティーをしては、折り紙をしたり、浴衣を実際に着て和服についてのプレゼンテーションをしたり、「だるまさんがころんだ」などのゲームをしたりしました。折り紙など、自分が実際にやることのできる活動だと、盛り上がります。こういう日本の文化を紹介するアクティビティーをして、それを生徒が真剣に取り組み、楽しんでいる姿を見るのはとても嬉しいことですし、やりがいを感じます。大学の授業ですが、ちゃんと授業に出て、教授の話をよく聞き、ノートちゃんと取っ



ておけば問題ないと思います。分からなければ、教わっている教授に質問すればとても親切に教えてくださいます。勉強する時間もちゃんと確保できると思います。

12月のワシントンDCでのコンフェレンスですが、とてもよい経験ができました。まず、夏のオリエンテーションで知り合った他のFLTAたちとの再会がなにより嬉しかったです。お互いの経験や知恵を共有することができました。コンフェレンスでは、たくさん講義があり、正直疲れますが、これから役立つような知識を与えてくれるので、とても有意義なものでした。私たち日本人は前年度に続いて、パフォーマンスをすることになりました。AKB48とソーラン節を混ぜて、若者文化と伝統文化両方を紹介することにしました。最初こそは、戸惑いもありましたが、自国文化を紹介することが自分たちの使命だと認識して、みんなで精いっぱいがんばりました。結果として、なかなかの好評価を周りから頂きました。

今、中間ポイントを過ぎたところですが、分からないことばかりで、もがきながらここまでやってきました。来学期は、今までのこの経験とコンフェレンスで得た知識を活かして、よりよい授業展開をしたいと思っています。そして、もっと文化を紹介する活動や生徒との交流を増やしたいと思っています。

最終レポート

私は、ジョージア州アトランタの、スペルマン大学に派遣されていました。スペルマン大学は、近隣大学を含め、黒人大学です。大学時代は、アフリカン・アメリカン文学を勉強していたので、黒人文化には興味がありました。なので、私にとってスペルマン大学への派遣は、なにか縁のようなものを感じていました。そして、実際9ヶ月、黒人コミュニティで生活していると、大学時代では学びきれなかった様々なことが分かってきて、大変おもしろい経験をさせて頂きました。

前期は初めてのことでばかりで、毎日無我夢中でした。生徒の前に立つのも、日本語を教えるのも初めて、大学にとって日本人のTAは初めてという状況でしたので、とりあえず何事もやってみようという気持ちでやっていました。中間レポートで、その頃のことには触れました。12月のFLTAのコンフェレンスで様々な教授法や情報を得て、わくわくした気持ちで後期を始めました。後期は、だいぶ気持ちにゆとりができたということもあり、前期の経験、コンフェレンスで学んだことを活かし、自分の授業内容を大きく変えてみました。宿題を作り直したり、オンラインを活用してみたり、オーラルが伸びるような工夫を試してみたりと随分実験的なことをさせて頂きました。このような自由をさせて下さったスーパーバイザーに感謝しています。結果としては、なかなか難しい部分もあり、思ったより効果的でなかったところもありました。しかし、前期よりも時間を上手く活用できたし、生徒との交流も増えたのでその点でよかったと思っています。生徒に新聞紙で兜を授業で作らせた時、できあがった兜を被って喜んでくれた時のことを今でもいい思い出として覚えています。学生としての生活では、アフリカン・アメリカンアートと女性学の授業を後期では受講していました。女性学の授業では、一週間に本を一冊読まなくてはいけなかったし、ディスカッションの多い授業だったので、最初はとても苦痛に感じました。しかし、もともと学生時代にこの分野を齧っていており、また黒人女性の生の声を聴くこともできたので、とてもおもしろかったです。アートのクラスでは、黒人の歴史に改めて触れ、その歴史の重みを感じることができました。充実した学生生活を送ったと思っています。FLTAとしての業務の他にもいろいろな経験ができました。南部の日本語教師の学会に行った時は、アメリカで日本語や文化を教えていらっしゃる先生方の、貴重なお話を伺うことができ、改めて教育について考えさせられました。また、アトランタの日本人商工会企画の日本語のスピーチ大会の中の高校生対象のクイズ大会では、質問者の役をさせて頂いたりしました。日本語を勉強するアメリカ人の高校生のがんばりを見ることができてとても感心しました。たくさん旅行もして、アメリカ内を十か所も巡ることができました。スペルマン大学で、ジャズについて勉強していたので、ニューオーリンズを旅行した時に生のジャズを味わった時の感動は今でも忘れません。FLTAの経



験を終えた後今思うことは、私はいろいろな人と出会い、いろいろな経験をすることができたということです。この経験は、私の財産だと思っています。最後になりましたが、日米教育委員会のみなさま、IIEの方々のサポートで、このような貴重な体験ができました。本当にありがとうございました。ここ培った経験を活かせるように努力していきたいと思っています。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011年度 参加者レポート

西城 恵子 ---University of Scranton

中間レポート

私はペンシルバニアのスクラントン大学で、初級と中級の日本語を教えています。スクラントンは自然に囲まれた田舎町です。あちこちにリスがいてキャンパスを歩くのは一日の楽しみの一つです。8月の終わりにスクラントンにやってきたのがつい最近のことにように思い出されます。私にとってすべてが新しい経験で、この数ヶ月はあっという間に過ぎていきました。教えている学生 の数は13人です。みんな個性的で素直で、優しい学生です。週3回の授業の準備は私の想像以上に大変なものでした。学期の開始当初は授業の進め方がわからず、あれもこれもと焦るばかりでした。一日一日「今日も何とかやり終えた」というぎりぎりの生活で、これから一年やっていけるのかと不安でいっぱいでした。

学生のために最大限のことをしてあげたいと思えば思うほど、授業の準備に時間をかけすぎて精神的にも肉体的にも困憊し、まわりが見えなくなっていたことがあります。そんなときでも頑張れたのは、まわりに私を支えてくれる人がいてくれたからです。ハウスメイトやオフィスをシェアしている先生たちが、いつも相談ののってくれました。一度スペイン語の先生が「もっと自分自身楽しむことも大切だよ」とアドバイスしてくれました。ごく簡単なことを言われただけなのに、当時の私の気持ちにその言葉がずっと入ってきました。教師として生徒のために精一杯努力することと同時に、もっとまわりを見渡して生活を楽しむこと、自分自身を豊かにしていくことの大事さに気づいた瞬間でした。

今学期の思い出は、学生と一緒に日本食を作ったことです。スクラントンのスーパーにはあまり日本の食材が売っていないため作られるものはかぎられてしまいますが、和風サラダ、鍋、オムライス、鶏肉のてりやきや味噌汁など10品以上を作りました。一緒に料理をすることで学生同士の仲もよくなり、私も学生を授業以外で知ることができました。作った料理はどれも好評で、みんな「おいしいです!」と食べてくれます。時々授業にもおにぎりや卵焼きなどを作って持っていきます。卵焼きを作ったときは、学生が私のオフィスに卵焼きのレシピをわざわざ聞きに来てくれたこともありました。日本料理のおいしさを遠く離れたアメリカの小さな町でもわかってくれる人



がいるのは、日本人として本当に嬉しいことです。

日本語の学生の数は少ないですが、みんな熱意をもって勉強してくれています。チャプターごとに行われるテストの前日は、学生自ら勉強会を開きテスト勉強をします。授業ではカバーできない個人の問題をここで解決している学生も多く、こういうところでひっかかっているんだと普段気づけない発見もできて私にとってもいい学びの場です。日本語の勉強から脱線して盛り上がることも多々ありますが、日本語を通して学生同士が仲良くなる姿を見れるのはとても嬉しいです。同じ目標をもって勉強できる相手がいるのは一生のうちに数あることではありません。まさに学生生活の醍醐味です。そんなかけがえのない瞬間に私も立ちえること、こんなに素敵な学生に出会えたこと、この勉強会に参加すると改めてさまざまなことに感謝の気持ちが生まれてきます。もっと日本語を上手になってほしい、学生のためにもっと私も頑張ろうというエネルギーが沸き起こります。

秋学期は幼児教育と外国語教授法の授業を取りました。幼児教育の授業では、先生がケニア出身だったためアメリカだけでなくアフリカの幼児教育についても学ぶことができました。この授業で学んだことは、教育における多様性の大切さです。アメリカは日本以上に多種多様な宗教や民族、人種や文化を持った人々が共に生活をしています。ひとつの国にいながらさまざまな国の文化を知ることができるのは、アメリカならではの体験です。人種や宗教など日本とは異なる問題があるからこそ、人との違いを認識し認め合う多様性への教育がさらに重要なのだと感じました。

スクラントン大学では年に2回、外国語の先生が自分の国の文化を紹介する「TA TALK」があります。市内の学校の先生など、多くの人々がプレゼンテーションを聞きに来ます。今回はアルゼンチン、フランス、台湾、日本の四カ国のプレゼンテーションが行われ、私は着物を着て日本文化を紹介しました。当日は着物の着付けに四苦八苦し、着物に締め付けられるのと緊張で心からTA TALKを楽しむ余裕はありませんでしたが、日本人が気にしないようなことにアメリカ人が興味を持っていることを知り、私自身改めて日本を見つめ直すきっかけとなりました。「日本語はひらがな、カタカナ、漢字と三つも違う書き方があるなんて、すごいね。どうやってそんなに覚えられるの？」と驚かれることがよくあります。日本では、そんなことあまり気にしていませんでした。日々、日本語の不思議やおもしろさを発見しています。

スクラントンでの生活も残り四ヶ月となりました。8月の渡米当初から、日本に帰ることを考えてはすでに寂しくなっていたのですが、この気持ちは今も変わっていません。ひとつ問題があるとすれば、食事のコントロールが難しいことです。大学の食事は食べ放題なので、ついつい食べ過ぎてしまいます。毎日アイスクリームを食べているのでビール腹ならぬ、アイスクリーム腹ができてしまいました。ホームシックになる暇がないほど忙しい毎日ですが、新鮮なスクラントンでの生活をこれ以上ないくらいに楽しんでいます。

最終レポート

スクラントン大学で日本語を教え始めたのは2011年8月の終わりでした。初めてのクラスの日を、今でもよく覚えています。アメリカ人の学生は真面目に勉強してくれるだろうか、本当に私で大丈夫だろうかと不安に思っていた気持ちが彼らの顔を見ているうちにすーっと消えていきました。緊張した面持ちで座っている学生を見て、少しでも彼らのためになるような授業をしようと決心しました。

授業が始まってからは毎日が本当にあっという間に過ぎていきました。初級の学生はひらがな、かたかなを覚えるのにとっても苦労したと思います。私たち日本人には当たり前のひらがな、かたかなも彼らにとっては覚えることはとても大変だったと思います。私は一度韓国語を勉強しようとしたのですが、ハングルが覚えられなくて諦めてしまいました。新しい言語を覚えるにはたくさんの努力と時間が必要です。苦労してひらがな、カタカナを覚えた彼らの努力は本当に素晴らしいものだと思います。日本に興味を持って、懸命に日本語を勉強している彼らの姿はいつも私に刺激を与えてくれました。

苦労した点は、個々の学生のレベルに合う授業作りをするこ



とでした。授業中はできるだけ日本語を使うようにしました。みんな私が何を言っているのかわかろうと必死に話を聞いてくれます。言っていることがわかれば大きな喜びとなり、それが更なる学習意欲の向上にも繋がります。しかし、何を言っているかわからない学生は自分だけ授業についていけない、何をしているかわからないと劣等感を持ってしまうこともあります。クラスの中にレベルの差ができてしまうのは仕方がないことですが、それをどう感じさせないで授業を進めていくのかは常に悩んだ問題です。

授業プランを作る際は、他言語を教える先生にも大きく助けられました。何かあったときには一人で悩まずに、いろんな人に相談することがとても大切だと感じました。経験豊富な先生からの授業へのアドバイスは、本当に助けられました。言葉の使い方が日本語と英語で違うのであれば、それをまず英語で言って、同じことが日本語では言えないというふうに導入してみたら?など、こんな教え方もあるんだと毎回刺激をもらいました。

授業で教えたことは、学生の反応にそのまま返ってきます。授業でミスをしたことも何度もあります。そのたびに自分のレベルの低さを実感し、学生に申し訳なくなりました。私にもっと知識や経験があったら、学生はもっと日本語を理解してくれるかもしれない、他の先生が教えていたらもっと早く上達していたかもしれない、そう思うと辛かったです。でも、そんなことを考える前に、目の前の仕事をただこなしていくしかありませんでした。教師として、学生を成長させる責任の重さを感じました。

それでも、学生は私についてきてくれました。年が近いことから、私の授業への感想をストレートに言ってくれます。教師としての経験はまだまだですが、どんなときでも学生に向き合うことは忘れずにやってきたつもりです。困っていたらどんなときでも助けてくれる、本当にすばらしい学生です。私をいつも悩ませてくれますが、その何倍も私を笑顔にしてくれます。日本語のかわいい間違いをしたときは笑いが止まらなくなって

しまうほどです。

2学期目はほぼ毎週日本文化を紹介するアクティビティーを行いました。スクラントンには日本語クラブもなく予算もあまりないので、できることは限られてしまいますが毎回学生は楽しんで参加してくれました。個人的にはバレンタインデーのカード作りがとても楽しかったです。バレンタインの日に好きな人へあげるという設定で日本語のメッセージカードを作りました。誰のカードが一番良くできていたかを競い、思った以上に盛り上がりました。日本とアメリカのバレンタインデーの違いも知ることができて、私自身もアメリカ文化への理解が一段深まりました。

また、5月には Festival of Nations という各国の代表が展示ブースを作って競い合うお祭りがありました。私は学生と日本チームを作り参加しました。3月から徐々に準備を進め、お祭り1週間前は夜遅くまで準備をしました。特に千羽鶴作りには苦労しました。折り紙自体初めての学生が、千羽の鶴を作ることは非常に大変だったはずで、難しい、できないと言いつつも最後の最後まで一緒に頑張ってくれました。個性的な千羽の鶴が完成したときは、学生も私も達成感に包まれました。お祭り当日は100人分の料理を作らなければならず、時間通りにできるか心配で焦っていた私を学生は「落ち着いて、大丈夫」と言って、励ましてくれました。他のチームより人数は少なかったものの、団結力では絶対に負けていなかったと思います。限られた時間の中でみんな一生懸命協力してくれました。入賞はできませんでしたが、見に来てくれたお客さんに「日本に行きたくなった」、「日本のことを知れてよかった」と言ってもらえてとても嬉しかったです。

スクラントンでの日々は本当にあっという間でした。今思うともっとできることがあったんじゃないかと、少し後悔する気持ちもあります。日本について紹介する機会が数回あったのですが、アメリカ人が日本をどう捉えているのか知ることができ、とても良い経験になりました。同時に、日本についてもっと多くの人に知ってもらいたいとも強く感じました。スクラントン大学はスペイン語やフランス語に比べて日本語の授業の規模は小さく、できることも限られてしまいます。その理由はいろいろあるとは思いますが、もっと日本を知ってもらえれば日本語の授業を取る学生も増えるはずで、日本の文化や情報を積極的に発信する力、アピールする力が、FLTAには必要だと感じました。私は日本について知らないことが多くあると、この9ヶ月で痛感しました。これから日本人として、日本を知る努力を更にしていきたいと思っています。

このプログラムに参加して、私はたくさんのかげがえのない思い出を作ることができました。世界中に友達ができ、様々

な国の文化も学べました。本当に人との出会いに恵まれた9ヶ月でした。ひとつひとつの出会いに感謝しています。これはこのプログラムに参加しないと経験できなかったことだし、この2011年という年に参加したからこそできた経験でもあります。スクラントンで出会ったアルゼンチン、フランス、メキシコのTAたちは、私にたくさんのことを教えてくれました。常に前向きに頑張ること、努力すること、笑うこと。彼らとの出会いが、今後の私の人生に大きな影響を与えることは間違いありません。このプログラムで学んだことを大切に、これから夢に向かって頑張っていけたらと思います。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011 年度 参加者レポート

高橋 友莉奈 ---Carleton College

中間レポート

「どうしよう!! 嬉しい! でも大丈夫かなあ・・・」これが、FLTA として渡米できるとの知らせがきた時、初めて思ったことでした。とてつもない嬉しさと緊張と信じられない気持ちと大きな不安と・・・そして希望が入り交じっていました。フルブライトの一員、FLTA としてこのプログラムに参加できるということはとても大きなこと。そしてこんなすばらしい経験は私の人生において一生の Life changing experience になるだろうと強く確信しています。ずっとしたかったアメリカ留学、そしてたくさんの国の人と交流できる FLTA プログラム・・・絶対に私の今後の人生を素晴らしいものに変えてくれる! そのためにこの機会を最大限に生かさなくてはと思いました。

私が LA (Language Associate) として働いているのは、ミネソタ州、Northfield にある Carleton College です。リベラルアーツではとても有名で、勉強熱心な生徒が多いです。またアメリカの各地、また世界の色々な国から学生が集まり、国際色豊かな大学です。私は英語を学ぶのはもちろんですが、いろんな国の人と関わり、それらの文化等を学びたいと思っていたので、自分にとってはとても嬉しい環境です。「ミネソタってどこ?!」と思う方もいるかもしれませんが、ミネソタは自然がいっぱいで、夜は星がすごく綺麗な良いところですよ! アメリカ1治安が良い!と旅行誌に書いてありました! 私も、同じミネソタに派遣されている赤松さんもミネソタが大好きです! 冬は40℃まで下がるみたいで、私はまだ体験していませんし恐怖ですが、これも日本にいたら体験できない良い経験だと思っています。

では Carleton College での LA としての仕事について紹介します!

Carleton College は Term 制で、秋学期、冬学期、春学期に分かれています。その学期、どの教授のもとでアシスタントをするかによって仕事内容は変わってきますが、私の秋学期の仕事は主にクラス外でのアクティビティ活動が多かったです。日本の映画の時間、お茶の時間、Radio Show、Language Table と Office hours です。その他、漢字クイズの採点や授業のサポート、生徒と会話練習、1学期に一度程度で生徒と日本料理をつくるというイベント等があります。生徒は宿題



等で忙しく、このようなアクティビティに頻繁に参加することが難しいこともあるようですが、生徒が日本語や日本の文化に興味を持ってくれるのはとても嬉しいことです。この他に、私は政治学の「民族紛争」の授業をとっていました。アメリカの大学はリーディングがたくさんあると聞いていましたが、本当にリーディングの量が多く、授業を一つしかとっていても読み終えるのが大変な程でした。大変なのはリーディングだけではなく! 授業中にあるディスカッション、色々なエッセイ (文献レビューや data analysis、group paper、final paper) や、Group project もあり、授業についていくので精一杯で、自分の英語力の低さを実感しました。そのため、授業の教授や、同じグループの友達にはとても迷惑をかけてしまったと思っています。しかし、Group project はとてもやりがいのあるものでした。5人で一つのトピックについて1学期を通して研究し、最後にプレゼンテーションとグループペーパーを作成します。グループメンバーは私が LA だからとか英語が流暢じゃないからといって特別扱いせず、一人のメンバーとして、他のメンバーと同じタスクを私にも分担してくれました。もちろんたくさん助けてもらいましたが・・・。最初はミーティングさえ苦痛でしたが、みんなと一緒に課題を終わらせ、次のステップに進んで行けたのが、とても嬉しく、達成感のあるものでした。なかなか話し合いに入っていくのは難しいものでしたが、自分の意見が採用されたときの嬉しさは今でも覚えています。アメリカの学生とそのようなグループワークができたことはとても良い体験だったと思っています。冬学期はもっと充実した学期にしたいと思っています。

最近毎日、本当に時間が経つのが早い…と実感しています。まだまだ先だと思っていた Mid Term conference が終わり、冬休みが終わりました。Conference はとても素敵な思い出になりました。世界中の FLTA が集まり、一緒に食事をしたり、同じ時間を共有したり、お互いの文化について紹介したり学んだり、そして一緒に踊ったりした時間は本当にかけがえのないものです。日本の FLTA としてタレントショーに参加したのも、とても素敵な経験でした。深夜2時位まで練習して、その後3時過ぎくらいまで話し込み、次の日全身が痛くなったことも今では大切な思い出です。

他の国のことを理解するためには、やはりその国の人と話して、友達になるのが不可欠だと思いました。今まで生きてきた中でたくさんのステレオタイプなどがありましたが、今までの出会いの中で、たくさんの国の人と出会って、その人たちのことが好きになって、そしてもっとその国、人々について知りたいと思うようになりました。残りのかけがえのない時間で、もっといろいろなことを経験して、成長して、学んで、それを将来の自分のため、そして人のためにいかすことができるように、冬学期も全力で毎日を過ごしたいと思います。このような素晴らしい機会を与えてくださり、そして支えてくださっている皆さんに心から感謝しています。ありがとうございます！

最終レポート

2011年8月に Carleton College に派遣され、10ヶ月がたち、素晴らしい経験・思い出と共に先月日本に帰国しました。このプログラムを通して、アメリカや他の国々の文化、人々について学んだだけではなく、自国である日本を違った角度から見ることも出来ました。また、アメリカ国内の旅行することもできたので、様々なアメリカの表情も見ることが出来、このプログラム無しでは体験できない貴重な体験をたくさんさせていただきました。これらの経験を通して、自分の将来にとってかけがえのない、そして自分の人生において誇ることが出来る10ヶ月を過ごさせていただきました。

中間レポートでは、渡米して始めの秋学期、Mid-term Conference について報告させていただいたので、それ以降の出来事を報告したいと思います。

まずは Carleton College における日本語 LA としての仕事についてです。冬学期・春学期は日本語の授業の担当の先生が入替わり、私の仕事内容も大きく変わりました。先学期の仕事に加え、学生がレコーディングした文章の発音等のチェック、ワークブックの採点、代講、個人的なインタビューの練習、イベントの賞状作り、節分や日本料理のイベントなどもさせていただきました。日本語 LA の仕事は先学期と比



べて増え、忙しさも増しましたが、その分学生と関わる時間が増えてやりがいと喜びを感じました。学期が進むにつれて学生たちも忙しくなるので、イベント等も工夫をし、「休まずランゲージテーブルに参加すると賞状や景品がもらえる」等色々アイデアが必要なきももありました。しかし、学生の頑張りを他のクラスメイトの前や形あるものとして表彰するのは、その学生自身、また他の学生のモチベーションの向上のきっかけにもなるので、秋学期からそのような企画をすれば良かったと思いました。表彰状をもらった学生が「あの表彰、locked box に大切にしまってあるよ！」と言ってくれたときはとても嬉しかったです。会話練習も、初級クラスの学生ともするようになったので、初級の学生たちが練習するトピックを考えるために悩んだりしましたが、学生が好きなプリーチ、ワンピース、ポケモン等の日本の Pop Culture や世界地図や動物等のイメージを使い会話練習をしたときは、学生たちもウキウキしながら練習をしてくれたので良かったです。生徒との距離が他の先生がたよりも近いアシスタントだからこそできる、日本で今流行っているものや、生徒の興味あるものを見つけ、それをアクティビティで使うということも大切だなと実感しました。秋学期は、授業を直接教えるということは無かったのですが、春学期には先生の代講も2回させていただきました。何度も初級と中級のクラスを見学させていただきましたが、実際授業をすることとなるととても難しいものでした。当たり前なのですが学生によって授業内のアクティビティの終わる時間、理解度が違い、待ち時間が増える生徒の集中力が落ちてしまう等、計画するだけではわからない実際の授業の難しさを改めて実感させられました。これはアシスタントをしているだけでは忘れてしまっていたと思うので、とても良い機会でした。この反省をもとに、2回目の代講はテンポを考えたり、学生の表情・反応をしっかりみたりして授業をするように心がけました。前回は授業の難しさを痛感した方が強かったのですが、2回目の授業では「やっぱり授業を計画し、それを学生とつくっていくのは面白い!!」と改めて感じる事ができました。学生たちとの交流が増えるにつれて、誕生会やイベントに誘ってくれ、授業外でも楽しい時間を過ごすことが出来ました。

このプログラム中の私自身の目標の一つに「アメリカの文化を全力で体験する」というものがありました。それを達成するため、大学のイベントには積極的に参加しました。秋学期には仮装してハロウィーンコンサート、冬学期には Mid-Winter Ball というダンスパーティ、春学期には野外で行われる Spring Concert や様々な国のパフォーマンスや料理を振る舞う International Festival 等たくさんのイベントに参加しました。この中でも一番思い出に残っているのが Mid-Winter Ball です。このイベントは学校全体の大きなダンスパーティで、学生のおぼ全員がドレスアップをして参加します。私は今まで学校の体育などでしかダンスをしたことがなく、社交ダンスなどはまったく未知の領域でした。それに日本にダンスパーティに参加する機会もあまりないので、ドレスアップ自体、とても恥ずかしいものでした。しかし、この貴重な体験を逃すことは出来ないと思い、思い切って参加しました。社交ダンスなんてステップもわからなかったのですが、友達や日本語をとっている学生たちが声をかけてくれ、一緒に踊ってくれました。学生と社交ダンスをしたり、友達と手をつないでジャンプして踊ったり、そのときの楽しさ、感動は今でも心に強く残っています。この経験に刺激され、春学期には体育で社交ダンスの授業をとったほどです。このような楽しい文化が日本にもあったら良いのに…と何度も思いました。私の通っていた日本の大学でも社交ダンスの授業はなかったのでとても楽しい経験ができました。

次に私が受講していた授業についてですが、冬学期はアメリカの歴史、春学期はアフリカ系アメリカ人研究を受講しました。春学期の授業は日本の大学では珍しい授業で、とても興味深いものでした。リーディングやエッセイ、プレゼンテーションもあり大変でしたが、アメリカの学生とアイデンティティ、人種、問題についてディスカッションし、その問題について考えたり、彼らの意見を聞いたりするのは非常に面白かったです。アメリカには色々な国から来た、色々な背景を持っている人々が住んでいて「アメリカ人」っていったい誰のことを指すのだろう…など日本に住んでいるだけでは気づくことも出来ない、複雑なアイデンティティについて考えることが出来、また色々な文献を読んで、「もう一つのアメリカ」について学ぶことが出来ました。

これらの学校生活の他に、地元の高校や老人ホーム等へ伺い、授業や施設を見学させていただいたり、国内の旅行を通して、色々なアメリカの表情を見たりすることが出来ました。州によって全く違う歴史や雰囲気があり、アメリカの大きさ、多様さを実感することができました。アメリカについて知るたびに、日本を違った角度から見ることもできました。これは自分では予想していなかったことなので、これからの自分の生活を見直し、感謝する上でとても大切なものだと思います。

ここまで振り返ってみましたが、本当に色々な経験をする事ができ、書ききれない程です。経験ももちろんですが、このプログラムやアメリカでの生活を通して本当に素晴らしい出会いがたくさんありました。私は大学時代、積極的に留学生と関わることをしなかったため外国の友達があまりいなく、そのことを後悔していました。しかしこのプログラムのおかげで今ではアメリカだけではなく世界の色々な所に友達を作ることが出来ました。これらの出会いを誇らしいと思うだけではなく、今まで以上にもっと世界に興味を持つことが出来ました。プログラムが与えてくれた多くの出会いをこれからもずっと大切にしていきたいです。

最後になりましたが、このような素晴らしい経験を与えてくださった IIE、フルブライト、日米教育委員会のスタッフの皆様、そして Carleton College の先生方には心から感謝をしております。またいつも私を支えてくれた友達、日本の家族、共に時間を過ごしてきた FLTA のみんなにもありがたい気持ちでいっぱいです。本当に10ヶ月間、ありがとうございました。この経験は自分だけのものではなく、他の方々に伝えられるよう精一杯努力していきたいです。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2011年度 参加者レポート

田村 光生 ---Rampo Coll of New Jersey

中間レポート

気がついたらもう折り返し地点に来てしまっている。このレポートを書こうとして、8月末に渡米してから1月までのことを思い返したときに、時間の流れの速さを改めて実感しました。それだけ FLTA としての生活が充実していたのだと思います。私が派遣されているのは、Ramapo college of New Jersey というところで、バスを使えば、キャンパスからは1時間ちょっとでニューヨーク市に行くことができる位置にあります。

今住んでいるところは、キャンパス内にある Visiting Scholar's house というところで、私の他には、パレスチナから来た FLTA とイタリア語の講師がおり、食事を一緒に作ったり、くだらないことから真面目なことまでいろいろ話をしたりして和気あいあいと暮らしています。この3人以外にも、海外の大学から先生方がいらして、1週間、ないし1ヶ月程度滞在することがあり、そうした折には、いろいろな話をうかがうことができます。こうした出会いはとても貴重な経験になっています。

Rapamo college では、教師として学生に日本語を教えたり、学生としてクラスを受講したりしていますが、私に与えられた身分は、adjunct professor で、学生として勉強するというよりも教師として仕事をする比重のほうが高いように思います。週2回、日本語の初級クラスを担当していますが、日本語を教えた経験もないうえに、私がこの大学で唯一の日本語教師なので、秋学期が始まった当初は、授業の準備にかなりの時間がかかるなど、苦勞することも多々ありました。けれども、だんだんと慣れてきて、今では楽しみながら日本語の授業をしています。

日本語は母語なのだから、教えるのは簡単だろうと思っていたのですが、想像していたよりもずっと大変でした。外国語としての日本語を教授する際に使用されている文法は、私たちが学校で習った国文法と全く異なっています。教えるべきことをまずは自分でしっかり飲み込んで、学生に説明したり、質問に答えたりしなければならぬのですが、日本語文法を理解するのも一苦勞です。



よく言われているように、アメリカの学生は、もちろん個人差はありますが、授業中に積極的に質問をしますし、なかなか鋭いことを聞いてきます。「ず」と「づ」はどうやって使い分けるのかという質問をされたことがあるのですが、その場で完全な回答をすることができず、後日説明したということもありました。こうした質問によって、自分がどれだけ日本語の知識がないのかということに気付かされ、ただ日本語が使えるというだけでは、日本語教師としては不十分だということを思い知らされます。

余談ですが、秋学期の授業でいちばんおもしろいなと思ったのは、日本語の「マクドナルド」をしっかりと発音できない学生が多かったことです。英語訛りが抜けないのです(もともと英語なのだから訛りというのは変ですが)。どうしても"McDonald"になってしまうんですね。それじゃあ日本人に通じないからと言って、学生たちには繰り返し練習してもらいました。その甲斐があっただけ、学期の終わりにはかなり上手に「マクドナルド」と発音できるようになっていました。このように、日本語を教えることで学ぶことは多いですし、時折、学生から英語やアメリカ文化について教えてもらうこともあり、日本語の授業を通して自分自身も成長し続けています。

また、日本語クラスの学生たちを私の住んでいる Visiting Scholar's house に招いて、食事会を開き、日本の食べ物を体験してもらっています。テキストにとんかつが出てきた後には、一緒にとんかつを作って食べたり、日本の映画を見たりするなどして、日本文化について学んでもらっています。

また、他の国の FLTA たちとの出会いは、FLTA プログラムの魅力のひとつと言えます。このプログラムに参加してからこれまでに、本当に数え切れないほどの人たちと知り合うことができました。Ramapo College に派遣される前の8月末にペンシルバニアで事前のオリエンテーションが行われたのですが、そこで様々な国の FLTA たちと交流を持つことができ、多文化に対する興味を抱ききっかけになりました。そして、アメリカ中に散っている FLTA が一堂に会した 12 月末のコンファレンスでは、夏に知り合った仲間たちと再会の喜びを分かち合い、アメリカでのそれぞれの経験を共有しました。さらに、ここでは新たに多くの FLTA を知り、多文化への視野がさらに広がったように思います。

このコンファレンスの最終日の夜に、審査を通った 15 カ国の FLTA たちが、それぞれの国の踊り等の文化を紹介する Talent show というイベントがあったのですが、私を含めた 6 人の日本の FLTA は、AKB48 のダンスとソーラン節を披露しました。私たちは、どの国の発表者たちよりも熱心に練習に取り組んでいたはずですが、コンファレンスの期間中は毎晩集まり、発表前日は夜中の 2 時過ぎまで、ああだこうだと意見を出し合いながら、ダンスを仕上げていきました。かなり力を入れたおかげもあってか、Talent show の後に、多くの人たちから、「日本がいちばんだった」という賞賛の言葉をもらうことができました。

これらの他にも、いろいろなイベントや活動にも参加し、アメリカ文化を体験し、学んでいます。Thanksgiving のときには、ペンシルバニアの家庭に 4 日間ホームステイをさせていただきました。ホストファミリーの方々が、私をいろいろなところに連れて行ってくださり、いわゆるブラックフライデーも経験することができました。一般家庭にお世話になるのは初めてでしたが、本当の家族のように扱っていただき、ホストファミリーにはとても感謝しています。

また、ニューヨーク市の小学生に日本の文化と伝統的な遊びを教えたことも、良い経験になりました。もちろん、彼らは日本について詳しいわけではなかったのですが、Sushi やアニメには慣れ親しんでいるようです。とくにアニメに関しては、私の知らないようなものも知っており、日本のアニメが予想以上に親しまれていることに驚かされました。

渡米してほぼ 5 ヶ月。これまでにこの国で経験したことは、すべてかけがえのないものですし、大きな財産になっています。そして、これからここで経験していくことも、私の今後の人生にとって、大切な時間になっていくのだと確信しています。あと 4 ヶ月。残された時間をできる限り実りのあるものにしていきます。



最終レポート

わずか 9 ヶ月間の滞在でしたが、いろいろなことを経験したり、学ばせていただいたりしました。そうした中で、日本人とアメリカ人は違う文化や感覚を持っているのだなと感じることがよくありました。なかなかおもしろい発見だったので、3 つほど紹介させていただきます。

すぐに気づかされるのは、よく言われているように、アメリカ人はよく喋るということかもしれません。例えば、スターバックスの店員は、ほとんどの店舗でも、お喋りをしながら仕事をしていたような気がします。話しているせいか、仕事のペースは日本に比べると遅く感じられました。こちらからすると、「話してないで早く注文したものを出してくれ」と思ったのですが。

それから、アメリカ人は、誰かがくしゃみをするとき "Bless you" と言ってあげるのをご存知だと思いますが、彼らが試験中にもそれを言ったのには、ちょっと驚きました。Midterm を受けていたときに、誰かがくしゃみをしたとたん、"Bless you" があちらこちらから聞こえてきたので、すこし驚きましたし、思わず笑ってしまいました。

また、アメリカにいる間にいくつかフルマラソンの大会に参加したのですが、走っている最中に全く知らない人に話しかけられたりもしました。日本人だったら、自分も他人も必死で走っているときに、話しかけたりしませんよね。1 月にルイジアナマラソンに出場したのですが、5km 走った辺りで、大学院生だという女性が話しかけてきて、さらにそこに 40 代くらいの男性が入って来て、3 人で話をしながら、しばらく併走しました。話した内容は、「どの州から来たのか」「仕事は何か」「何回目のマラソンか」というような本当に他愛のないものでした。この女性は、ハイペースで苦しいと言っていた割によく喋っていました。このときもアメリカ人は話好きだなと思ったものです。

それから、彼らは、時間と場所にこだわらないで(と言ったら

大袈裟かもしれませんが) 食事をしているような印象を受けました。図書館のスタッフ(学生のアルバイトですが)が勤務中に平気でハンバーガーを食べていたし、学生がサンドウィッチやハンバーガー、スナックなどを食べながら講義を聴いているという光景は当たり前でした。教えている先生も何かを口にしながらか講義をしているということもありました。もちろん、授業担当を担当する先生によっては、食べながら授業を受けることを禁止している場合もあると思います(ちなみに、スピーキングの妨げになるので、私の日本語のクラスでは飲食は禁止しました)。

食事に対する価値観の違いなのだと思いますが、日本では許されないだろうし、もし許されていても、ほとんどの日本人は、そうすることに抵抗を感じるはずで。試しに、というか昼食を食べ損ねてしまったので、一度だけサンドウィッチを食べながら授業を受けてみたのですが、何だかそわそわしたし、食べ物の方に意識が行ってしまって、講義に集中できませんでした。

もうひとつのおもしろい発見はアメリカ人のファッション感覚です。春先でしたが、何気なくジーンズに、カジュアルな長袖のYシャツを着ていたら、Ramapo Collegeの先生でもある友人が、「今日はどうしてドレスアップをしているのか」と聞いてきました。最初は何を言っているのかよくわかりませんでした。アメリカ人にとって、ジーンズにYシャツというのはおしゃれの部類に入るのだなと納得しました。思い返してみると、Thanksgivingのホームステイのときに、親戚の集まりに参加するときに、男の子2人がドレスアップをするという、着てきたのがジーンズとYシャツでした。そういえば、大学生の普段着を見ても、ほとんどの場合、日本の学生のほどには気を使っている様子はありませんでした。日本人からすると、アメリカ人は、ファッションに無頓着だと見えるかもしれませんが、アメリカ人からすると、日本人は気を使い過ぎていると見えるのかもしれない。

瑣末な事柄ばかり述べてしまいましたが、日本語のクラスと受講している授業にも触れていきたいと思います。

日本語の授業ですが、学生からの評価は好評で、授業を組み立てていくのに四苦八苦した甲斐がありました。秋学期の終わりに、学生による授業評価があったのですが、「I have learned a great deal in this course」という項目に対して、12人中11人の生徒が、6段階評価の中で最高の"strongly agree"と回答しており、もう1人の学生も、2番目に良い評価の"agree"(そう思う)と答えていました。また、"creating a good classroom environment"や、"Great teacher"や"very good sensee"といったコメントを学生からももらいました。

しかしながら、春学期は履修者がわずかに4人しかいませんでした。当初希望者ももっといたのですが、必修科目と時間が重なったり、仕事の都合がつかなくなったなどの事情で、学生の人数は減ってしまいました。ただ、少人数のおかげで、よりアットホームな雰囲気です授業ができました。

また、JETプログラムなどのプログラムに応募するためや、大学院に出願するために、3名の学生が推薦状を依頼してきたので、これを引き受けたり、演劇を専攻する学生が、脚本に入れた日本語の校正を依頼してきたので、添削を行ったりするなど、授業以外にもいくつか仕事をし、良い経験を積むことができました。

さて、そんな日本語のクラスですが、大学の方針により、来年度は廃止されることが決定されています。この大学では言語のクラスが縮小傾向にあり、今年度すでに、フランス語、中国語、ドイツ語のクラスがなくなっていました。日本語も昨年度までは、各学期に2クラスずつあったのが、今年度は私の担当するクラスだけでした。そして、来年度は日本語とアラビア語が廃止され、残るのはイタリア語とスペイン語だけということになっています。そんな中、私の授業を受講する学生たちが、日本語クラスの存続を求めて、署名を集め、請願書を学部長に提出するという活動を行いました。そして、学部長と話し合いの場が持たれたのですが、財政上の問題があり、結果的には、来年度の日本語クラスの開講はなしということになりました。けれども、こうした行動を起こしてまで日本語学習を継続したいという意思をもってくれたことをうれしく思いました。どんな方法でも、彼らには日本語の勉強を続けて欲しいと思います。

続いて、自分が受講したクラスについてです。春学期は、English Grammar: Theory and Pedagogyというクラスを受講していました。将来学校の先生になりたい学生のための科目だったようです。いわゆる動名詞や不定詞、関係代名詞といった英文法を主に扱っていたのですが、日本の中学校高校で一般的な英語教育を受けてきた私にとって、これらは、ものすごく簡単に感じられました。けれども、アメリカ人の学生にとって、英文法は難しかったようです。小テスト(日本の高校でやる文法問題のようなものです)などは、私だけ満点で、他の学生がぱっとしない成績だということもよくありました。ただ、だからと言って、もちろん私が彼らより英語ができるというわけではありません。当たり前と言えば当たり前なのかもしれませんが、一般的なアメリカ人の大学生が英文法を理解していなかったというのは、実際に目の当たりにするとおかしな光景でした。

もちろん、英文法だけ勉強するなら、このクラスを取る必要はなかったと思いますが、このクラスでは他にも、同じアメリ

カ英語でも dialect よって、語彙、音声に違いがあるということや、新聞や日常生活の中でネイティブスピーカーが文法的誤った英語使っていることが多々あることなど、興味深いトピックを学びました。さらに、このクラスでは、Midterm と Final exam の他に、レポートを2つ提出しなければならず、なかなか大変でしたが、レポートでは、Oxford English Dictionary でまだ定義されてはいたないが、新聞などで使われている新しい言葉の語源や背景などをまとめたり、日本語と英語の音声構造の違いについて論じるなど、英語に対する知見を広められたと思います。

FLTA プログラムでは、アメリカ文化を感じることができましたし、学生的な立場だけでなく、教員としての立場からも、学んだことが多くあり、普通の留学とは少し違った経験になったと思います。この9ヶ月で経験したことを、今度、学校現場等に還元できればと思います。同様に、アメリカで実践してきた日本語教育を、英語教育に応用し、日本の英語教育の向上に少しでも寄与できるように努めていきたいと思います。